

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 21 年度派遣報告書

——エチオピア・アディスアベバ大学, アリ語, H21. 7. 26-H22. 1. 26——

平成 20 年入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程 2 回生
野口 真理子

自身の研究テーマについて

近年医療技術や医療サービスの発達などにより、いわゆる「先進国」が次々と高齢社会を迎える中で、「途上国」といわれてきた国々でも高齢化が進みつつある。医療や福祉の制度が整備されているとはいえない「途上国」の農村地域においても、近代化に伴い若年層が就学や出稼ぎ、就職を目的として都市に集中する一方、高齢者は農村に留まるなど、人口移動によって高齢化が生じる場合も増えてきている。

我が国においても高齢者福祉に対する関心はここ数年で非常に高まっているが、「高齢者」に焦点を当てた研究のほとんどは、「高齢社会」にすでに突入した先進国の高齢者福祉施設などを対象にしたものや、医学的な側面に注目した質問票を使って定量的な調査を行うことが多い。社会学や人類学などの異なる分野との共同研究や、「高齢化社会」を未だ迎えていないといわれているアフリカに暮らす老人の生活の実態を把握するような事例研究の積み重ねはほとんどなされていない。

本研究は、エチオピア西南部の農村に暮らす高齢者に着目し、彼らが日々どのような暮らしをしているかをはじめとする、多様な高齢者の生活実践の実態を実証的に把握するとともに、彼らの周囲の人々との関係を見ることによって、地域社会における制度や福祉にとらわれない「ケア」の可能性について検討することを目的としている。

研修言語の概要

エチオピアには約 80 もの言語があるとされる [Gozalves ほか 2004]。研修言語であるアリ語は、言語系統的にはアフロ・アジア語族のオモ系言語と位置づけられ、主にエチオピア西南部に約 20 万人いるといわれているアリという人びとによって話されている。

アリ語は独自の文字を持たず、文法書や辞書は未だ出版されていないが、アムハラ文字を使ってアリ語に翻訳された聖書が存在する。



語学研修の様子。絵付きの本などを使用。

語学研修の内容について

語学研修は、エチオピア西南部のジンカ市にある、アジスアベバ大学管轄の南オモ研究センターにて、アリ語を母語とする講師にほぼ毎日 1 時間ずつのレクチャーを受けた。授業は 1 対 1 の会話形式の授業で、基本的にアリ語で授業を進め、英語は補助的な使用にとどめた。

研修期間中はアリの老夫婦の家庭にホームステイし、授業以外では彼らとアリ語で会話するよう努めた。理解できなかった言葉や文を数回聞き直しながらできるだけ正確にノートに書き取り、翌日アリ語の講師に質問することで少しずつ語彙を増やし、基本的な文法構造を容易に理解することができた。

またその学習法は、独特な言い回しや、決まり文句などを学ぶ際にも非常に役立った。

アリ語に慣れてきたところで、講師と一緒にアリ語の質問票を作成した。休講日にはその質問票を持ってアリの農村部に住む高齢者世帯を訪問し、世帯の構成員に関する聞き取り、毎日の食事内容、マーケットでの売り買いについて、畑仕事についてなどの聞き取りを行った。初めのうちは緊張もあり、うまく聞き取れないことも多く、アリ語講師による補助を頼んでいたが、次第に講師がいなくても、質問項目を追加して自分でインタビューをしに行けるようになった。



ホストファミリーと一緒に。

研修期間中に印象に残った体験や経験

ここ近年、学校教育を受ける若者も増え、調査地周辺含め多くの人がエチオピアの公用語の一つであるアムハラ語を話すことが出来るためか、報告者のような外国人はアリ語よりもアムハラ語の方が話せると考える者も多い。しかしそんなときに報告者がアリ語で話しかけたりすると、多くの人が決まって驚いて見せ、おもしろがって、どうしてそんなにアリ語が話せるようになったのか、どうしてアムハラ語じゃなく、アリ語を選んだのか、質問攻めにあうことがよくあった。

また、アリ語に慣れてくると、アリの人たちが普段何気なく言う言い回しがふと耳にはいつてくるものが多く、それを覚えてできるだけ自然だと思える場面でその言い回しを使用したりすると、「そんな言い方だれに教わったの!？」だとか、「ちょっと今の聞いた?彼女うまいこと言うわよね。」などと言われたりして驚いたが、非常に嬉しい場面だった。



子どもたちに編み込みを教わっているところ。

目標の達成度や反省点について

今回の語学研修において設定した目標は、通訳を介さずに報告者自身がアリ語でコミュニケーションをとったり、インタビューを行ったりできるアリ語の会話能力と、アリの人びとがナチュラルスピードで話すアリ語を理解できるアリ語聞き取り能力の習得であった。この語学研修を通して、意思疎通のためのアリ語の会話能力はついたが、時折分からない単語に遭遇して会話を中断してしまうこともあったので、語彙力という点においてはまだ課題が残るといえる。また、ナチュラルスピードの会話の聞き取りは、その会話の内容を大まかにつかむということはできるようにはなったが、集中力が続かず細かな情報まで聞き取れなかったり、誤解してしまったり

ということがあった。この点においても語彙の補充と会話スピードに慣れること、また今後自身で用法・用例を増やしていくことで、聞き取り能力も、相手に伝わる話す力も向上すると考えられる。

参考文献

Fco. Javier Gozalbez Esteve, Dulce Maria Cebrian Flores. 2004. *Touching ETHIOPIA*. Addis Ababa, Ethiopia: Shama Books.